母袋俊也 MOTAI Toshiya

青梅 3 年あるいは 7 年

僕が、「アートプログラム青梅」に造形大の学生たちと共に参加するようになって今年 3 回目となった。一体何回、中央高速から圏央道を走ったことになるだろうか。その際、菅生トンネル、友田を通過する毎回、眼下に拡がる全く異なる大荷田の風景 (fig.1) を思わない時はない。

走行する車中からの移動する前進性の視点と固定のそれとの差はあるものの、それにも増して高低差がこれほど全く異なる二つの風景を作り出すこと。また同一場の風景の多角性とも異なるこの重層性には、一つの場を異なる時間が重層共有する多次元性のようなものを覚醒させられるのである。そして風景が、我々の視線によって形成されていくものであること。デカルトの直観、すなわち世界は近代的個人＝主体の視線によって秩序立てられていくことを改めて認識させられる。実は、この圏央道下に拡がる風景と想念上の青梅の地形をモデルに制作し 07 年、吉川英治記念館に発表したのが「TA・OHNITA」(fig.2) であった。

今回は、「空間の身振り」とのテーマを受け BOX KI-O-KU に、2003 年制作の 17 mを超す長大画面に筆致が走る「TA・SHOH〈掌〉」と「Qf・SHOH」を展示した。当初は、旧農林高校講堂での展示を考えていた。講堂内の小さなガラス板を一単位とし、大きな面を構成する窓はとても美しく、外界を切り取る《絵画のための見晴らし小屋》を室内に設置、その窓の像をモデルに絵画制作、展示することを構想したのだった。その一枚一枚のガラスの小さなズレが作り出す木々の像＝姿は、今もなお僕を捉え対象として興味と刺激をそそぎ続けている。

しかし、青梅というサイト＝風景に対しては 07 年吉川英治記念館での試みに始り、その年に開催されたシンポジウムではパネラーとして参加「都市化する中での役割」のテーマで、“ 場の特性 ” について絵画の立場から議論、問題提起した。さらに翌 08 年には、造形大の学生とともに「見晴らしフレーム」を使用したワークショップを小学生たちを対象に行い、生の豊かな人的交流を経て青梅市立美術館で報告展示をした。このように僕の青梅での活動は、「TA・OHNITA」をはじめ、思うに絵画と青梅のサイト＝風景とのかかわりであった。

今回は、むしろ青梅のサイトスペシフィック的なアプローチから一旦はなれ、BOX KI-O-KU の大空間にアクセスし、「TA・SHOH〈掌〉」とその時期制作した「Qf・SHOH　220」の展示を考えた。今は “TA 系 ” と “Qf 系 ” は二種の系として、それぞれ独自の原理のもと展開している。だが、03 年制作当時はまだ未分化で、その双方の画面に〈SHOH＝掌〉はその形象を結んでいる。それは絵画に再び具体性、すなわちメッセージ、形象性を取り戻そうとしたものであり、その後〈SHOH＝掌〉は “Qf 系 ” のみで展開されていくこととなる。

なぜ〈掌〉であったかは、ここでは触れないことにするが、その “TA” と “Qf” の分岐点そのものを、言い換えれば僕自身の文脈を青梅、BOX KI-O-KU にアクセスしようとしたのである。この試みは Qf 作品の “ 仮想原理でもある立方体 ” が《Qf キューブ》という新作形態として実体を得る結果をもたらした。これは大きな収穫であった。本展終了後まもなく、ギャラリーなつかで開催された個展「Qf・SHOH〈掌〉90・Holz / 145」展では一辺 90cm の「Qf キューブ 90、09- 1 」(fig.3) が展示されることになった。

ここで、「アートプログラム青梅」を絵画の立場から考えてみる。絵画はその発生からトランスポート性を持ち、環境への絶対的普遍性の欲求がホワイトキューブの概念を形成したと考えられる。むしろ絵画は元来サイトを切り離し、付随しているあらゆる物語からの独立性を確保、普遍性を担保しようとしてきたのである。

ではその絵画がわざわざ青梅というサイトに出向くことの意味とは。そしてそこで何を見出しうるのか。それはむしろ結果として絵画はその危うさを知らされることになる。また前提である絶対的視覚に疑いを持つことにもなるだろう。しかし実はこれは内省性をもった絵画にとってすごく大切なこととも考えられる。制度やニュートラルな箱の中で守られるのではなく、鍛えられていくこと、自覚的であることが絵画には求められているように思えるのである。またその生成には協働性は馴染みづらいようでもあり、自らを閉じているようにも映る。

これらを自覚した上で本来持つ絵画の強度を確保しつつ、青梅というサイトにアクセスし，場そのものを作品によってゲニウス・ロキ化すること、すなわち表現が場を変質させ、あらたな物語＝ナラティーブをかさねていけるかが青梅で問われていると思えてくる。サイトスペシフィックとは、ナラティーブの重層性に他ならない

fig.1
大荷田地区

fig.2
M370 TA・OHNITA

photo: fig.1-2-3-4= artist

M332 TA・SHOH〈掌〉
2003
アクリル、油彩 / 綿布
220x1757cm(14 枚組)
BOX KI-O-KU (旧都立繊維試験場)c 室

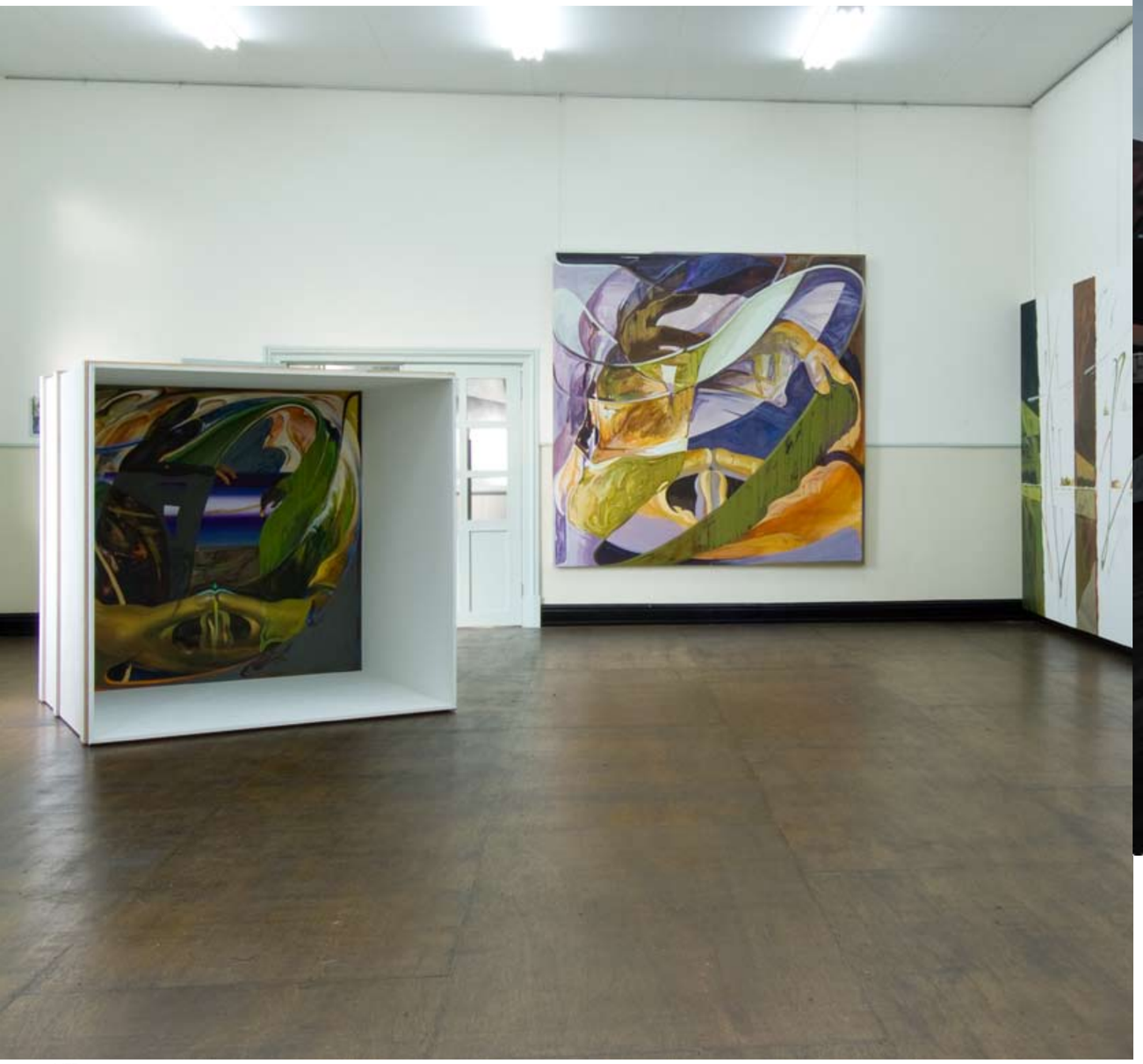
一方、「アートプログラム青梅」の立場から、数多ある同類の展覧会の中での「アートプログラム青梅」を考えたとき、実は 4 つの教育機関からなる学生展を本展が内包していることは大いなる特徴として浮上する。ならばその作品群の強度が問われることともなるだろう。僕らが、彼らを未発生の作家とみなしていない以上は、彼らもまた大学という隔離された特殊な箱の中で守られているのではなく、作家としての自覚と強度が要求されることになる。

7 回を終え、「アートプログラム青梅」の次なる展開を今考えようとしたとき、その “ 強度 “ こそが問われ、そのために大いなる更新が要求されているように思われる。

母袋俊也
1954 年長野県生まれ。1978 年東京造形大学絵画専攻卒業。1983 － 87 年フランクフルト美術大学ライマー・ヨヒムス教授に学ぶ。1986 年より複数パネル様式による、フォーマートと精神性の相関をメインテーマに制作を展開する。1995 年、偶数パネル作品を「TA 系」と命名。1999 年「絵画のための見晴らし小屋」を制作開始、2003 年 越後妻有アートトリエンナーレ他各地に制作設置、TA 系絵画と連動展開する。2001 年 正方形フォーマート「Qf 系」の開始。主な個展として、2006 年「風景・窓・絵画－アーティストの視点から：母袋俊也の試み」埼玉県立近代美術館、2007 年「母袋俊也〈絵画のための見晴らし小屋〉－水平性の絵画〈TA〉の展開」辰野美術館（長野）、2008 年「母袋俊也 窓－像 KY OB AS HI」INAX ギャラリー（東京）、2009 年「Qf・SHOH〈掌〉90・Holz/145」ギャラリーなつか（東京）など。神奈川県藤野で制作、在住。

fig.3
M400 Qf・SHOH〈掌〉90・Holz-3 / Qf キューブ 90.09-1

fig.4



MTD-1
左（箱内）:
M361 Qf・SHOH 150-3op
2005
アクリル、油彩 / 綿布
150x150 cm

箱 :
Qf キューブ 150,09-1
2009
木材、塗料
154x154x154 cm

奥壁 :
M337 Qf・SHOH 220
2003
アクリル、油彩 / 綿布
220x220 cm

MTp-1
右 :
M350 Qf・SHOH 150-4
2005
アクリル、油彩 / 綿布
150x150 cm

箱 :
Qf キューブ 150,09-1

MTD － 3
左 :
M336 Qf・SHOH 220
2003
アクリル、油彩 / 綿布
220x220 c m